

日本国民文学全集 22

漱石名作集

夏目漱石

河出書房版

日本文学全集 第二二卷 漱石名作集

定価三四〇円

昭和三十年十一月二十五日初版印刷

昭和三十年十一月二十五日初版発行

著者 夏目漱石

発行者 河出孝雄

東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 川口芳太郎

東京都港区芝三田豊岡町八

検印
不要

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話二九三七二一番 振替東京一〇八〇二番

圖書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

漱石名作集

吾輩は猫である

一

坊っちゃん

一九

三四郎

三五

こころ

三三

年譜

四六

解説

伊藤 整 四七

吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生れたかあとと見当がつかぬ。なんでも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はこゝで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中が一番残忍な種族であつたそう。この書生というのとは時々われわれを捕えて煮て食うという話である。しかしその当時はなんとという考えもなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時なんだかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであらう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉緑だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中から時々ぶうぶうと煙を吹く。どうも咽せばくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草とい

うものである事はようやくこのごろ知つた。

この書生の掌のうちでしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないがむやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて、と、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあととはなんの事やらいくら考え出そうとしても分らない。ふと気がついて見ると書生はいない。沢山おつた兄弟が一足も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つてむやみに明るい。眼を明いていられぬくらいだ。果てななんでも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は薬の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生が又迎いに來てくれるかと考へつた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たがだれも來ない。その内池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて來た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、なんでもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やり

に這つて行くというやうやくの事でなんとなく人間臭い所へ出た。ここへはいつたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもの、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れないのである。一樹の蔭とはよくいったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうしていいか分らない。その内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末でもう一刻も猶予ができなくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へといて行く。今から考へるとその時はすでに家の内にはいつておつたのだ。こゝで吾輩はかの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしてもがまんができません。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、なんでも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんという者はつくづくいやになつた。この間おさんの

さんまを偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒騒しいんだといながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出してもお台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を捻りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へはいってしまつた。主人は余り口を聞かぬ人に見えた。下女はくやしそに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人はめつたに吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋にはいつたぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし實際はうちのものかというやうな勉強家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしてゐる事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食つたあとでタカジャスターゼを飲む。飲んだあとで書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰

り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでもできぬ事はないと。それでも主人にいわせると教師はどつらいものはないそうでは友達が来るたびになんとかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ當時は、主人以外のものにはなほはなほ不人望であつた。どこへ行つてもはねつけられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのも分る。吾輩は仕方がないから、でき得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかつたから已を得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は縁側へ寝る事とした。しかし一番心持のいいのは夜に入つてこのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へはいって一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後

大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でもなんでも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出して来る。現にせんだつてなどは物指で尻をひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等はわがままなものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかつて追ひ廻して迫害を加える。この間もちよつと疊で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が願えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君などは逢うたびごとに人間ほど不人情なものはないと言つておらる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行って四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを削減せねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思

う。又隣の三毛君などは人間が所有權という事を解していないといつて大に憤慨している。元來われわれ同族間では目刺の頭でも鱈の臍でも一番先に見つけたものがこれを食う權利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えてよくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見つけた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つて澄ましてゐる。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に關すると阿君よりもむしろ樂天である。ただその日その日がかどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

わがままで思ひ出したからちよつと吾輩の家の主人がこのわがままで失敗した話をしよう。元來この主人はなんといつて人に勝れてできる事もないが、なんにでもよく手を出したがる。俳句をやつてはとどぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいいたり、時によると弓に擬つたり、謡を習つたり、又あるときはヴァイオリンなどをブービー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後

架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられてゐるにも関せず一向平氣なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰り返している。皆んながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考えになつたものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思うと水彩繪具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で屋敷もしないで絵ばかりかいてゐる。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやらだれにも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやつてゐる人が來た時に下のような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見るとなんでもないようだが自ら筆をとつて見るといまさらのようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほど許りのないところだ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔イタリーの大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。画をかくならなんでも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。

り。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思ふならちと写生をしたら」「へえアンドレア、デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人はむやみに感心してゐる。金縁の裏には嘲けるような笑いが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく縁側に出て心持よく屋敷をしていたら、主人が例になく書齋から出て來て吾輩の後で何かしきりにやつておる。ふと眼が覺めて何をしてゐるかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア、デル・サルトを極め込んでゐる。吾輩はこの有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつづつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執つてゐるのを動いては氣の毒だと思つて、じつとしんぼううしておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つてゐる。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といい敢えて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違ふ。吾輩はベルシヤ産の猫

のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけはだれが見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというより外に評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もともとこれは寝ている所を写生したのでから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア、デル、サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催している。身内の筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予ができぬ仕儀となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあゝあと大なる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち破らしたのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思つてのそのそ遣い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」とどなった。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。外に悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今までしんぼうした人の氣も知らな

いで、むやみに馬鹿野郎呼わりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しはいい顔でもするのならこの漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間というものは自己の力量に慢じて皆んな増長している。少し人間より強いものが出来て来て窘めてやらない。くつてはこの先どこまで増長するか分らない。わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持よく日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで樂々昼寝のできない時や、余り退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の氣を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快く一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木を一本一本喰ひながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心づかざるごとく、又心づくも無頓着なるごとく、大きな軀をして長々と体を横たえて眠っている。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫で

ある。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出すように思われた。彼は猫中の大王ともいふべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いていた。

彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえは一体なんだといった。大王にしては少言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力がこもっているの、吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと險悪だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大いに輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきれたら。全てどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の家にいるのだ」「どうせそんな事だろうと思つた。いやに瘠てるじゃねえか」と大王だけに氣焰を吹きかける。言葉つきから察す

るとどうも良家の猫とも思われぬ。しかしその膏切つて肥満している所を見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。

吾輩は「そういう君は一体だれだい」と聞かざるを得なかつた。「已れあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまりだれも交際しない。同盟軟遠主義の的になつてゐる奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試して見ようと思つて左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極つていらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強そうだ。車屋にいと御馳走が食えと見えるね」

「なあにおれなんぞ、どこの国へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。おめえなんかも茶晶ばかりぐるぐる廻つていねえで、ちつと己の後へくつて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに間違えるように太れるぜ」
「追つてそ願う事にしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでゐるよう

「寛め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は太い肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびくつかせてあらうかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩はたびたび黒と邂逅する。邂逅するごとに彼は車屋相当の氣焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

ある日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶晶の中で寝転びながらいふ雑談をしてゐると、彼はいつもの自慢話をさも新しうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下のごとく質問した。「おめえは今までに鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりもよほど發達してゐるつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はしてゐたものの、この間に接したる時は、さすがに極りがよくはなかつた。けれども事實は事實で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとうとうとうと思つてまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突つ張つてゐる長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元來黒は自慢をするだけにどこか足りない所があつて、彼の氣焰を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやうい猫である。吾輩は彼と近づきになつてからすぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもな

まじい己れを弁護してますます形勢をわるくするの愚である、いっその事彼に自分の手栞話をしゃべらしてお茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とつたろう」とそそのかして見た。果然彼は牆壁の穴所に啞喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとつたろう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼はなのお話をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いちぢつて奴は手に合ねえ。一度いちぢつて酷い目に逢つた」「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をばちつかせていう。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へ這い込んだらおめえ大きないちぢの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生つて氣で追つかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやつたね」と喝采してやる。
「ところが、おめえいざつてえ段になると奴め最後つ尻をこきやがつた。臭えの臭くねえのつてそれからつてえものはいちぢちちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至つてあたかも去年の臭氣を今なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍まで廻わした。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣をつけてやろうと思つて「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は余り鼠を捕るのが名人で鼠

ばかり食うものだからそんなに肥^ふって色つやがいいのだから」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は愕然^{がくぜん}として大息^{おほいき}している。「考^{かん}げえるとつまらねえ。いくら穢^けいで鼠をとったって——てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえ。人のとった鼠を皆んな取り上げやがって交番へ持って行きあがる。交番じゃだれが捕^とったか分らねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか己のお蔭^{かげ}でもう一円五十銭くらい儲けていやがる癖に、ろくなものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てもののあ体のいい泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟はわかると見えてすこぶる怒った容子で背中の毛を逆立てている。吾輩は少々氣味が悪くなったからいい加減にその場を胡魔^ま化して家へ帰った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の分子になって鼠以外の御馳走を獲^とってあるく事もしなかった。御馳走を食うよりも寝ていたほうが氣楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。要心^{ようしん}しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近ごろに至っては到底水彩画において望みのない事を悟ったものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇という人に今日の会で始めて出逢

った。あの人は大分放蕩^{ほうたう}をした人だというがなるほど通人らしい風采^{ふうさい}をしている。こういう質^{しつ}の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたというよりも放蕩をするべく余儀なくせられたというのが適當であろう。あの人の妻君は芸者だそうだが、羨ましい事である。元來放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家をもって自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画におけるがごときもので到底卒業する氣づかいはない。しかるにも関せず、自分だけは通人だと思つて澄^はましている。料理屋の酒を飲んだり待合へはいりから通人となり得るという論が立つたら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。吾輩の水彩画のごときはかかないほうがましであると同じように、愚昧^{ぐまい}なる通人よりも山出しの大野暮^{おのぐら}のほうが遙かに上等だ。

通人論はちょっと首肯しかねる。又芸者の妻君を羨しいなどという所は教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくの如く自知の明あるにも関せずその自惚心はなかなか抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いてい

る。

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛^なつて置いたのをだれかがりっぱな額^{がく}にして欄間に懸けてくれた夢を見た。さて額になった所を見ると我ながら急に上手になった。非常に嬉しい。これならりっぱなものだと独りて眺め暮らしている。夜が明けて眼が覚めてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭^{めいりょう}になつてしまつた。

主人は夢の裡まで水彩画の未練を背負^{せお}つてあるといふと見える。これでは水彩画家は無^む論夫子のいわゆる通人にもなれない質だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美術者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切った。主人は平氣な顔をして「君の忠告に従つて写生を力めているが、なるほど写生をすると今まで氣のつかなかった物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔から写生を主張した結果今日のように発達したのと思われる。さすがアンドレア、デル、サルトルだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア、デル、サルトルに感心する。美術者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ詰^つられた事に氣がつかない。「何が」君のしきりに感服しているアンドレア、デル、サルトルさ。あれは僕のちよつと捏造^{ねつぞう}し

た話だ。君がそんなにまじめに信じようとは思わなかった。ハハハハ」と大喜悅の体である。吾輩は縁側でこの對話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる事が記さるであらうかと予め想像せざるを得なかった。この美学者はこんないい加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の楽しみにしている男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線にいかなる響を伝えたかを毫も顧慮せざるもののごとく得意になって下のような事を饒舌った。「いや時々冗談を言う人と人が真に受けるので大いに滑稽的美感を挑撥するのはおもしろい。せんだってある学生にニコラス・ニックルベトがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、その学生が又馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておった。それからまだ面白い話がある。せんだってある文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーンの話が出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐っている知らんといった事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事

を知った」神經胃弱性の主人は眼を丸くして聞いかけた。「そんな出鱈目をいってもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くのは差支ない、ただ化の皮があらわれた時は困るじゃないかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「な」にその時や別の本と間違えたとかなんとかいうばかりさ」といつてけらけら笑っている。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似た所がある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないといわんばかりの顔をしている。美学者はそれから面をかいても駄目だという目つきで「しかし冗談は冗談だが画というものは實際むずかしいものだよ、レオナルド、ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠などにはいつて雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい模様が自然にできているぜ。君注意して写生して見給え」と面白いのができるから「又欺すのだろう」いへこれだけはたしかだよ。實際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでもいいような事だね」なるほど奇警には相違ない」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後駈になった。彼の光沢ある毛はだんだん色が褪めて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂

が一杯たまっている。ことに著しく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈とその体格の悪くなった事である。吾輩が例の茶園で彼に逢った最後の日、どうだといつて尋ねたら「いたちの最後尻と肴屋の天秤棒には懲々だ」といった。

赤松の間に二三段の紅を綴った紅葉は昔の夢のごとく散つてつくばいに近く代る代る花簪をこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南向きの縁側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日はほとんどまれになつてから吾輩の屋敷の時間も狹められたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立てこもる。人が来ると、教師が厭だ厭だという。水彩画もめったにかかない。タカジャスターゼも功能がないといつてやめてしまった。小供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食わないから別段肥りもしないが、まずまず健康で跛にもならずその日その日を暮している。鼠は決して取らない。おさんはいまだに嫌いである。名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯この教師の家で無名の猫で終るつもりだ。

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫なからちよつと鼻が高く感ぜらるるのはいがある。

元朝早々主人のもとへ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑で塗って、その真中に一の動物が蹲踞している所をバステルで書いてある。主人は例の書斎でこの絵を、横から見たり、豎から眺めたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、豎から見たりしている。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにしたり、又は窓の方へむいて鼻の先まで持ってきたりして見ている。早くやめてくれないと膝が揺れて險呑でたまらない。ようやくの事で動揺が余り劇しくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうという。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品に半ば開いて、落ちつき払つて見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア、デル、サルトを極め込んだものでもあつてまいが、画家だけに形体も色彩もちゃんと整つてできている。だれが見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じゃない吾輩である事が判然とわかる

ようになりつぱに描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。できる事ならその絵が吾輩であるという事を知らしてやりた。吾輩であるという事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵みに浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断つて置きたいが、元來人間がなんぞという猫々と、事もなげに輕侮の口調をもつて吾輩を評價する癖があるのはなほだよくない。人間の槽から牛と馬ができ、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考へるのは、自分の無智に心づかんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあらうが、はたから見ても余り見つともいい者じゃない。いくら猫だつて、そう粗末簡便にはできない。よそ目には一列一列平等無差別、どの猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会にはいつて見るとなかなか複雑なもので十人十色という人間界の語はそのまゝここにも応用ができるのである。目つきでも、鼻つきでも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髯の張り具合から耳の立ち並び、尻尾の垂れ加減に至るまで同じものはない。器量、不器量、好き嫌い、粹無粹の数を悉くして千差万別といつても差支なくらいである。

る。そのように判然たる區別が存しているに聞らず、人間の眼はただ向上とかなんとかいって、空ばかり見ているものだから、吾等の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底できぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔からある語だ。そうだがその通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発達したつてこればかりは駄目である。いわんや實際をいうと彼等が自ら信じているごとくえらくもなるともないのだからなおさらむずかしい。又いわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りになく解するというのが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸いついて、かつて外界に向かって口を開いた事がない。それで自分だけはすこぶる遠親したような面構をしてゐるのはちよつとおかしい。遠親しい証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく今年には征露の第二年目だから大方熊の画だらうなどと気の知れぬことをいつて澄ましてゐるのもわかる。吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながらかく考えていると、やがて下女が第二の絵端書を持って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じゃを躍っている。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」

と黒々とかいて、右の側に書を読むや躍るや猫の春一日という俳句さえ認められてある。これは主人の旧門下生より来たのでだが見たって一見して意味がわかるはずであるのに、迂闊な主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻って、はてな今年に猫の年かなと独言をいった。吾輩がこれほど有名なになったのをまだ気が着かずにいると見える。

ところへ下女が又第三の端書を持ってくる。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らに、忍縮ながらかの猫へも宜しく御伝声願ひ上げ奉り候とある。いかに迂闊な主人でもこう明らさまに書いてあれば分るものと見えてようやく気がついたようにフンと言いながら吾輩の顔を見た。その眼つきが今までとは違つて多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在を認められなかった主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩のお蔭だと思えばこのくらいの眼つきは至当だろうと考える。

折から門の格子がチリン、チリン、チリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次に出る。吾輩は着屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めているのだから、平気で、ものごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔つきをして玄関の方を見る。なんでも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈になれば申し

分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれほどの勇氣もない、いよいよ牡蠣の根性をあらわしている。しばらくすると下女が来て寒月さんがお出でになりましたという。この寒月という男はやはり主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒業して、なんでも主人よりりっぱになっているという話である。この男がどういう訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋つてゐる女がありそう、なさそう、世の中が面白そう、つまらなそう、凄いな、艶っぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のようなしなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話をしに来るのからして合点が行かぬが、あの牡蠣の主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から大いに活動しているものですから、出よう出ようと思つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎みたような事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引つ張る。この羽織は木綿でゆきが短い、下からべんべら者が左右へ五分位ずつはみ出している。「エへへ少し違つた方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ、実はある所で椎茸を食ひましてね、何を食つたっ

て?」その、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前歯で噛み切ろうとしたらぼろりと歯が欠けましたよ。椎茸で前歯がかかるなんて、なんだか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「ああその猫が例のですか、なかなか肥つてゐるじゃありませんか、それなら車屋の黒にだつて負けそうもありませんね、りっぱなものだ」と寒月君は大いに吾輩を賞める。「近ごろ大分大きくなったのさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなくる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりやお聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とビヤノの伴奏でなかなか面白かつたです。ヴァイオリンも三挺ぐらいになると下手でも聞かれるものです。二人は女で私の中へまじりましたが、自分でもよく弾けたと思ひました」「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は羨ましそうに問いかける。元来主人は平常枯木寒厳のような顔つきはしているものの実の所は決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋のある小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それがたいいていの婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱には恋着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは真理だと感心し

たくらいな男である。そんな浮気な男がなぜ牡蠣の生涯を送っているかというのは吾輩猫などには到底分らない。ある人は失恋のためだともいうし、ある人は胃弱のせいだともいうし、又ある人は金がなくて臆病な性質だからだともいう。どっちにしたって明治の歴史に關係するほどの人物でもないのだから構わない。しかし寒月君の女連れを羨まし気に尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食い切った。吾輩は又欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。なに二人ともさる所の令嬢ですよ、御存じの方じゃありません」と余所余所しい返事をする。「ナール」と主人は引張つたが「ほど」を略して考えている。寒月君はもういい加減な時分だと思つたのか「どうもいい天気ですな、お閑なら御いっしょに散歩でもしましょうか。旅順が落ちたので市中は大変な景氣ですよ」と促して見る。主人は旅順の陥落より女連れの身元を聞きたいという顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思ひ切つて立つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の記念とかいう二十年來着古した結城紬の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だつて、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走も正月もない。ふだ

ん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、あつても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬して寒月君の食い切つた蒲鉾の残りを頂戴した。吾輩もこのごろでは普通一般の猫ではない。まず桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偷んだ猫ぐらいの資格は充分あると思う。車屋の黒などはもとより眼中にない。蒲鉾の一切れぐらい頂戴したつて人からかれこれいわれる事もなからう。それにこの人目を忍んで間食をするという癖は、何も吾等猫族に限つた事ではない。うちのおさんなどはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。おさんばかりじゃなく現に上品なしつけを受けつつあると細君から吹聴せられてゐる小児ですらこの傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に对い合つて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食うパンの幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちよつと砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあつた。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通

り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。しばらく兩人は睨み合つていたが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。

妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見ている間に一杯一杯一杯と重なつて、ついには兩人の皿には山盛りの砂糖が堆くたつて、壺の中には一匙の砂糖も余つておらんやうになつたとき、主人が寝ぼけ眼を擦りながら寢室を出て来てせつかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまつた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優つているかも知れぬが、智慧はかえつて猫より劣つているかも知れぬ。そんなに山盛りにしないうちに早く嘗めてしまえばいいに思つたが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から黙つて見物していた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、その晩遅く歸つて来て、翌日食卓に就いたのは九時ごろであつた。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまつて雑煮を食つている。代えては食ひ、代えては食う。餅の切れは小さいが、なんでも六切れか七切れ食つて、最後の一切れを椀の中へ残して、もうよそうと箸を置いた。他人がそんなわがままをすると、なかなか承知しないのである

が、主人の威光を振り廻して得意なる彼は、濁った汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平気で澄ましている。妻君が袋戸の奥からタカジャスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」という。「でもあなたでん粉質のものには大変功能があるそうですから、召し上ったらいいでしょう」と飲ませたが、「澱粉だらうがなんだろうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きっぱい」と細君が独言のようにいう。「厭きっぱいのじゃない薬が利かんのだ」「それだつてせんだつて中は大変によく利くよく利くとおっしゃつて毎日毎日上つたじやありませんか」「こないだうちは利いたのだよ、このごろは利かないのだよ」と対句のような返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある薬でも利く氣遣いはありません、もう少ししんぼうがよくなくっちゃあ胃弱なんぞは外の病氣にあ違つて直らないわねえ」とお盆を持つて控えたおさんを顧みる。「それは本當の所でございます。もう少し召し上つて御覧にならないと、とてもよい薬が悪い薬かわかりますまい」とおさんは一も二もなく細君の肩を持つ。「なんでもいい、飲まんのだから飲まんのだ、女なんか何かわかるものか、黙つていろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカジャスターゼを主人の前へ突きつけてぜび詰腹を切らせようとする。主人はなんにもいわず立つて書斎へはいる。細君とおさんは顔を

見合せてにやにやと笑う。こんなときに後からくつついて行つて膝の上へ乗ると、大変な目に逢わされるから、そつと庭から廻つて書斎の縁側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエビクテタスとかいう人の本を披いて見ておつた。もしそれが平常の通りわかるならちよつとえらい所がある。五六分するとその本を叩きつけるように机の上へ抛り出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して下のよるな事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が榻模様の春着をきて羽根をついていた。衣裳は美しいが顔はすこぶるまずい。なんとなくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくつても、よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さえ刺つてもらやあ、そんなに人間と異つた所はありあしない。人間はこう自惚れているから困る。

宝丹の角を曲ると又一人芸者が来た。これは脊のすらりとした撫肩の恰好よくでき上つた女で、着ている薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い歯を出して笑ひながら「源ちゃん昨夕は——つい忙しかったもんだから」といった。ただしその声は旅鴉のごとく皺枯れておつたので、せつかくの風采も大い

に下落したように感ぜられたから、いわゆる源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向いて見るも面倒になって、懐手のまま御成道へ出た。寒月はなんとなくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解しがたいものはない。この主人の今の心は怒っているのか、浮かれているのか、又は哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癪を起しているのか、物外に超然としているのかさっぱり見当がつかぬ。猫などはそこへ行くと單純なものだ。食いたければ食ひ、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要があるかも知れないが、我等猫属に至ると行住坐臥、行尿送尿、悉く真正の日記であるから、別段そんな面倒な手数をし、己れの真面目を保存するには及ばぬと思う。日記をつけるひまがあるなら縁側に寝ているまでの事さ。

神田の某事で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカジャスターゼは無論いかん。だ

れがなんといつても駄目だ。どうしたって利かないものは利かないのだ。

むやみにタカジャスターゼを攻撃する。独りで喧嘩をしているようだ。今朝の肝癰がちょっとここへ尾を出す。人間の日記の本色はこういう辺に存するのかも知れない。

せんだって〇〇は朝飯を齧ると胃がよくならないから二三日朝飯をやめて見たが腹がぐうぐう鳴るばかりで功能はない。△△はぜび香の物を断てと忠告した。彼の説によるとすべて胃病の源因は漬物にある。漬物さえ断れば胃病の源を涸らす訳だから本復は疑いなしという論法であつた。それから一週間ばかり香の物に箸を触れなかつたが別段の驗も見えなかつたから近頃は又食い出した。××に聞くとそれは按腹揉療治に限る。ただし普通ではゆかぬ。皆川流という古流な揉み方で二度やらせれば大抵の胃病は根治できる。安井息軒も大要この按摩術を愛していた。坂本龍馬のような豪傑でも時々治療をうけたというから、さつそく上根岸まで出掛けて揉まなければならぬと。ところが骨を揉まなければ癒らぬとか、臍附の位置を一度顛倒しなければ根治がしにくいとかいって、それはそれは残酷な揉み方をやる。あとで身体が綿のようになつて昏睡病にかかつたような心持がしたので、一度で閉口してやめにし

た。A君はぜび固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかつた。B氏は横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやつて御覧という。これも多少やつたがなんとなく腹中が不安で困る。それに時々思い出しように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が氣になつて本を読む事も文章をかく事もできぬ。美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かしたからこのごろは廃してしまつた。C先生は蕎麦を食つたらよからうというから、さつそくかけとりをかゝるがわる食つたが、これは腹が下るばかりでなんらの功能もなかつた。余は年来の胃弱を直すためにできる限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目がある。これからは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球のように間断なく変化している。何をやっても永持のしない男である。その上記の上で胃病をこんなに心配している癖に、表向きは大いに瘦我慢をするからお

かしい。せんだってその友人で、某という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にはかならないという議論をした。だいたい研究したものと見えて、条理が明晰で秩序が整然としてりっぱな説であつた。氣の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭腦も學問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでいる際だから、なんとかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思つたものと見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であるといったような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極めつけたので主人は黙然としていた。かくのごとく虚栄心に富んでいるもの、実際にはやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をあんなに沢山食つたのも昨夜寒月君と正宗を引っくり返した影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする氣力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論いえる身分でない。したがって存外嫌いは少ない方だ。小供の食いこ